

Title	地形調和仮説からみた中央アラスカユピック語の指示詞の使用に關する一考察
Author(s)	田村, 幸誠
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 11-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77022
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

地形調和仮説からみた中央アラスカユピック語の指示詞の使用に関する一考察

田村幸誠

1. 序

近年、認知類型論的なアプローチの中で、注目される研究の流れに、地形 (topography) などの言語使用環境 (ecology) が言語に観察されるカテゴリーにどの程度影響を与えるのか、という問題に争点をおいた研究がみられる (e.g. Everett 2013; Everett et al. 2015, 2016; Maddieson et al. 2011; Palmer 2015)。その流れの中で、Palmer (2015) は、Levinson (1996, 2003) が提案する空間指示の基本分類 (特に絶対参照枠の規定) に関して、地形が果たす役割が十分に考慮されていないという批判を行い、代わって、地形調和仮説 (Topographical Correspondence Hypothesis) を提案し、2節で概観するマナム語などを含め、様々な言語における絶対方位相当表現の分析を行っている。本論文の目的は、この Palmer の主張点を考慮に入れながら、中央アラスカユピック語 (Central Alaskan Yup'ik (エスキモー・アリューート語族、以下、CAY と記す)) に観察される、地形に依拠した指示詞の使用を考察することにある。

争点を掘むために、まず、例文 (1) と図1、および図2を考察してみよう。

- (1) a. 英語: Use that tool. 「あの道具を使いなさい。」
 b. CAY: Aturru kiugna/unga/ikna.etc. calissuun.
 use-INTRA.IMP2SG.3SG. that.ABS tool.ABS

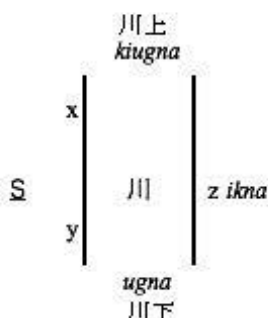


図1 屋外での指示詞の使用



図2 室内での指示詞の使用

3節で議論するため、ここでは概略を示すのに留めるが、CAY には、英語の指示詞 *that* に相当すると考えられる指示詞 (語幹) が約27個ある。従って、指示詞の対応関係を考えるだけでも、約27通りの表現が (1a) の英語表現に与えられることになる。図1は、川を中心とする、村の典型的な地形を示したものである。ここで、(1) の話者が図1における S の位置にいると仮定しよう。道具が x の位置にある場合、CAY では、*kiugna* という指示詞が英語の *that* に相当するものとして選択される。これは、話者の視界に「川上」が入るためである。また、道具が y の位置にある場合、今度は「川下」が視界に入るため、異なる指示詞、*ugna* が選択される必要がある。さらに、道具が、z のように川の向こう岸にある場合、英語の *that* の対応表現としては、*ikna* と川上、川下とは異なる表現が選択されなければならない。

さらに、CAY の指示詞に関して、非常に興味深い点は、図2に示したように、建物の中でも同様の指示詞の使い分けが働くことである。(1a) が室内で用いられた場合 (図2は8畳くらいの広さの部屋を想定された)、出口 (ドア) が視野に入るような位置にある 'that tool' (x) に対しては、*ugna* が、そして、その反対の方向、つまり、奥の壁が視界に入るような位置にある y には、*kiugna* が、また、部屋の真ん中を超えて、向かい合うように位置する z には、*ikna calissuun* を用いる必要がある。

ここで、Levinson (2003) による直示表現 (deixis) に関する記述を確認してみることにしよう。

- (2) "[I]t is important to appreciate that deixis itself does not constitute a frame of reference. This is because deictic specifications of location merely use the deictic centre as a special kind of ground, and they do not themselves contribute to angular specifications of the kind that constitute coordinate systems." (Levinson 2003: 71; 下線は筆者)

(2)の記述で特に注目したいことは、指示詞を含めた直示表現はその普遍的特性として「角度の指定 (angular specification)」をもたないと規定している点である¹。例えば、英語の直示表現である、*this* や *that* は、

¹ より一般的な直示表現の定義として、次のものをあげる。 "... most typically it [=deixis] designates referring expressions which indicate the location of referents along certain dimensions, using the speaker (and time and place of speaking) as a reference point

話者を基準に、360度、どの方向にも用いることができることを確認されたい。特定する物体が、話者の前方、後方、横、あるいは上下、どこにあらうとも、条件さえ満たせば、this や that を用いてその物体を指示することが可能である。同様に、日本語の指示詞語根である、「あ」や、「こ」、「そ」においても、例えば、「こ」の使用においては、話者に近いという認識が最も重要で、指示詞自体に方向、すなわち、角度の指定は含意されていないと考えられる。これら英語や日本語の例を見る限り、上記、(2) の Levinson による直示表現の分類基準は的を射たものと考えられる。

しかし、上の、例文 (1) と図1、および図2で考察した CAY の指示詞の使用は、Levinson による (2) の記述に関して、その普遍性に疑問を投げかける。例えば、図1において、x、yそしてzを特定するのに、指示詞である kiugna、ugna、そして ikna を入れ替えて用いることはできない。言い換えると、空間上に用いることのできない方向が存在するのである。この事実は、kiugna、ugna、そして ikna が角度の指定を内在化させた直示 (指示詞) 表現であることを意味する (3節で他の指示詞と合わせてさらにこの問題を議論する)。

この事実とあわせて確認しておきたいことは、CAY の指示詞は、指示詞と分類されることから推測できるように、所有形にはできないことである (Jacobson 1995:76)。先に、例えば、図1の説明において、「川上が視界に入った場合、kiugna」のように説明したが、指示詞を the river's that *kuig-em kiugna-a/kiugu-a 'river-ERG (川の) that-3SG.3SG (そのそれ)' のように、方向を特定するのに用いた要因 (ランドマーク) を属格句などの修飾表現を伴って明示することができない。下の (3) において示した、認知文法の直示表現及びグラウンディング表現 (grounding predication) の考え方に沿った形で説明すると、英語の指示詞 this や that において、ランドマーク (参照点) として機能する直示的中心 (deictic center) が顕在化しない (e.g. Look at [that (*from me/us)]!; *Where is my that?) のと同じように、CAY の指示詞表現においても、話者を含めたすべてのランドマーク (参照点) 情報は非明示的 (implicit) であり、明示されると上で示したように非文法的な表現となる。

- (3) “[T]here is explicit reference to these landmarks, even when they are identified with the speech-act participants (*near me; apparent to you and me*). By contrast, it is obligatory with *this* that reference point remain implicit...” (Langacker 1991:93; 下線は筆者)

本稿では、まず、次節で、Palmer (2015) による、Levinson (1996, 2003) の空間指示における基本分類 (特に絶対方位の規定) の批判を概観する。その上で、3節において、CAY の指示詞表現の特徴を地理的ランドマークとの関係に焦点を当てながら考察する。また、それに続いて、指示詞語根の絶対方位表現への転用とその動機付けに関する議論を行う。本稿を通じて特に考えたい問題は、(I)指示詞において、(3) に示したように、ランドマークが顕在化されないことが、(2) に示した定義、すなわち、360度使える、意味としても簡素なものしか表し得ないことを、通言語的に見た場合には必ずしも含意しないということ、逆に、(II)指示詞の特性ゆえに (Diessel 2006)、話者間の顕在化しない「共有した知識」が重要に機能していることである。

エスキモー・アリュート語族の空間指示表現に関する包括的な考察としては、Fortescue (1988, 2011) がある。また、CAY における代表的な指示詞の分類としては、Jacobson (1984, 1995) がある。Fortescue (1988) は、基本4方位の表現を中心に、エスキモー・アリュート語族に観察される空間表現の特徴を丹念に調べ、その全体像を示そうとした重要な研究である。しかし、その一方で、問題点として、エスキモー・アリュート語族の言語・文法的背景的知識をもたない読者にはなぜそのような分類や説明が可能になるのかが皆目分からないものとなってしまうことが挙げられる。Jacobson (1995) は CAY の学習を前提に書かれた非常に重要な体系的文法書であると位置づけられる。しかし、その一方で同様に、指示詞が実際にどのように使われるのかに関しては、インストラクターの補助なしには理解しづらいものとなっている。

上記の先行研究では引用されていないが、宮岡 (1978, 1987) はそれらの先行研究に先立ち、CAY の空間表現の有り様を最初に掘り起こし、エスキモー諸語の空間指示の特徴を明確化した重要な論考である。特に、そこでは、CAY の村の地形とともに、指示詞の使い方が説明されている。つまり、上で述べた論争に、20、30年先立って、空間表現と地形の関係に関する記述を提唱していたわけである。本稿では、宮岡にはじまり、Jacobson、Fortescue らによって記述されたエスキモー諸語における地形と空間指示の分析を基盤に、Palmer の地形調和仮説、および、認知文法の観点からその通言語的含意を考察することを目的としている²。

2. 絶対指示枠と地形調和仮説

Palmer (2015) による地形調和仮説は、Levinson (1996, 2003) による絶対参照枠 (absolute frame of reference) の規定に関する議論から生まれたもので、そのポイントは、絶対参照枠の概念的な基盤形成にお

² or 'deictic centre' ...” (Cruse 2006:44; 下線は筆者)

³本稿における CAY の指示詞の説明は、1次ソースとして、CAY 母語話者である、Caan Toopetlook さんの観察に依っている。

Toopetlook さんは、Kuskokwin 川支流の Nunapicuaq 村の出身で、聞き取り調査は Kuskokwin 川河口に位置する Bethel 市でおこなった。また、観察の妥当性を考察するために、Oscar Alexie さん、Sophie Alexie さんには、Napaskiak 村、及び Napakiak 村に案内していただいた。3人の先生に記して感謝申し上げます。

いて、その基準として働く方位 (bearing) は、(Levinson の想定する、) 単なる指標的役割を超えて、地形 (topography) など言語の使用環境に強く動機づけられたものとみなした方がいいのではないかと、ということにある。このポイントを理解するために、まず、Levinson (1996, 2003) による、言語に観察される三つのタイプの空間参照枠、すなわち、固有参照枠 (intrinsic frame of reference)、相対参照枠 (relative frame of reference)、そして、絶対参照枠 (absolute frame of reference) の特徴を順に確認してみよう。(Levinson (2003) において、空間表現はまず、参照枠を示すものと示さないものに大別される。つまり、上の (2) に示したように、角度の指定 (angular specification) をもたない空間表現は、参照枠なしで使用されるものとして分類され、一方、今から概観する三つのタイプはどれも角度の指定 (angular specification) をもつ、すなわち、参照枠とともに理解される空間表現として大別される)。

- (3) The car is in front of the house.
- (4) The orange is in front of the bowl.
- (5) The car is north of the house.

まず、(3) は、車の空間的な位置を示すのに、固有参照枠を用いているとされる例である。「前」という空間的に車 (referent) を位置付ける方向関係が、家 (関係項 relatum) の構造 (玄関の向き) から作り出されている。関係項が独自に作り出した方向 (direction/angle) との関係で指示対象物 (referent) が位置づけられることを特に固有参照枠による空間指示と呼んでいる (詳しくは Levinson 1996: 336-43, Palmer 2015: 182)。

(4) は、相対参照枠を用いた空間指示と考えられる例で、固有参照枠との大きな違いは、関係項からの方向を特定するのに、観察者 (viewer) の位置が必須となる点である。「家」の場合と異なり、ボウルは構造的に非対称的な向きを持たないため、この関係項からの「前」という方向関係は、観察者の視点の位置関係を補助に作り出されたものとみなすことができる。指示対象物、関係項、そして観察者という3者間の関係で指示対象物の位置が特定されるのが相対参照枠の特徴である (see Levinson 2003: 43-47; Palmer 2015: 183)。

最後に、(5) は、絶対参照枠を用いた指示対象物の位置特定の例であると考えられる。関係項 (house) からの方向を決める際に、外的な固定された方位 (bearing) を用いる空間指示のやり方である。言い換えると、あたかも関係項 (この場合は、家) の上に、大きなコンパス (Slope と呼ばれる) を乗せるかのようにして、関係項から指示対象物への方向を作り出すのが絶対参照枠の特徴である (詳しくは Levinson 2003: 47-50, Palmer 2015: 183-184)。

今、固有参照枠が2者間の関係、そして、相対参照枠が3者間の関係で指示対象物の位置を特定することを述べた。では、絶対参照枠は何者間の関係で位置を特定しているのだろうか。(5) に沿って考えると、まず、観察者の位置は、家から「北」という方向を作り出すのに貢献しない。また、「北」という何か具体的な存在物があって、そこから方向を計算している訳でもなく、また、「北」というたびに、何か特定のランドマークが喚起される訳でもない。従って、Levinson (2003: 50) では、Slope という概念は援用するものの、外部のランドマークが方位の計算に関与しないという意味で、絶対参照枠は基本的に指示対象物と関係項による2者間の関係によるものであるとみなしている。そして、絶対参照枠によって与えられる Slope (方向・方位) は抽象的で恣意的でかつ固定された (abstract, arbitrary and fixed) ものであると規定している (Levinson 2003: 48, 309)。

絶対参照枠による位置特定は、絶対的な方位を示す Slope に依存した2者間の関係で決まる、というこの Levinson の定義に Palmer は疑問を呈する訳であるが、その前に、もう少し、この「抽象的で恣意的でかつ固定された」という規定が絶対参照枠において用いられる根拠を考えてみよう。英語や日本語の基本方位に相当する方位・方角に対して、(風が一定方向に吹く地域では)「風上」や「風下」、(大きな山岳地域では)「登り (側)」や「下り (側)」という地形に関する語をあてている言語が数多く見受けられる。例えば、日本語で「家の北のほうにある」というところを「家の風上にある」とか、「家の下り (側) の方にある」あるいは、「家の陸 (側) にある」という表現を使う言語がそれにあたる (Palmer 2015: 185にわかりやすいまとめがある。また、特に、Levinson 2003: 309の議論を参照)。もし、それらの言語の話者が英語の、例えば、north と同じように絶対方位としてそれらの表現を使っていると想定した場合に、次のことが考えられる。例えば、たまたまある日、風が少し逆の方向に吹いたからといって、「風上」という表現によって表される方角は変わらないであろうし、また、その地域にある山を登っていて、地形的に一旦下るところがあったとしてもその下っているところだけ急に方位が逆転するというものもない、ということである。つまり、「抽象的で恣意的でかつ固定された」において、Levinson の言わんとすることは、絶対参照枠の基本方位として用いられる限り、たとえ、地形に由来する語を基本方位に用いていたとしても、実際の地形は、方位表現として抽象化され、その結果、恣意的なものにならざるを得ないということにある。言い換えると、実際にある地形は絶対参照枠の使用に関して、指示対象物の位置を特定するためのランドマークとしては機能しないということにある。ここに、絶対参照枠は2者間の関係で決まるということの本質がある (Levinson 2003: 90)。

では、このことを前提に、Palmer (2015:187) が解説している、パプア・ニューギニアのマナム島で話されているマナム語に観察される方位語の特徴を見てみることにしよう。(Palmer の記述は、Lichtenberk (1983) を基にしたものであり、下の図 3 と 4 は Palmer (2015:187) の記述をもとに筆者が作成したものである。) 図3に示されているように、マナム語では、oti と oro というのが一つの軸 (axis) を形成し (「陸側」-「海側」)、それに直交するかたちで、海岸線に沿って bala と ra?e が一つの軸を形成することで基本4方位が形成されている。興味深いことは、マナム島は丸い形をしており、島全体におけるこの基本4方位の使用を図式化すると 図4 のようになることである。

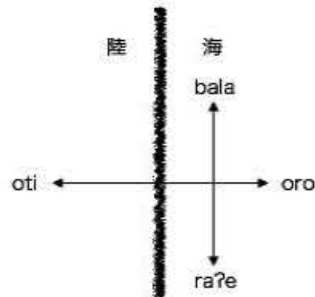


図3 Manam Bearings (A)



図4 Manam Bearings (B)

気づかれた方も多いと思うが、図3では、マナム語の基本4方位の機能は英語や日本語の基本4方位と同じようなものであるとみなせるが、図4になると英語や日本語のそれとは大きく異なる性質を示す。例えば、図の上側が「北」とであると単純に想定した場合、島の一番「北」にいる人にとって、「南」が oti、そして、海に向かって「右側」が bala となるのだが、島の一番「南」にいる人にとっては「北」が oti、そして、海に向かって「左側」が bala になるからである。

Palmer (2015) が地形調和仮説のなかで特に強調することは、図4のような方位を使うマナム語のような言語においては、実際の地形、この場合、島が (非顕在的な) ランドマークとして有効に機能していることである。つまり、関係項から指示対象物を bala, ra?e, oti, あるいは oro を用いて指定する場合、関係項が島のどこにあるのかを話し手・聞き手の間で共有していないと指示対象物の方向を特定できないからである。別の見方をすると、bala と ra?e の軸は、島のどこから見ても、時計回り・反時計回りの関係を、oti と oro の軸は島のどこからみても、常に、陸側と海側の関係を示す。従って、Levinson の絶対参照枠で想定されている「抽象的で恣意的でかつ固定された」という規定を厳密に適用すると、つまり、方位関係のみを抽象化した Slope が話者の頭の中にあって、それが絶対参照枠として具現化すると考えると、このマナム語の方位は絶対参照枠を使っていないということになる。Palmer (2015:189) によれば、方位・方角表現にこのマナム語のような特徴、つまり、言語が実際に話されている場の地形を (非顕在的な) ランドマークとして援用している言語はたくさんあり、Levinson の絶対参照枠を厳密に適用する研究者はそれを絶対参照枠の使用としてはみなさないし、ルーズに適用する研究は絶対参照枠とみなして研究をすすめるという問題が生じているという。Palmer (2015:223) の地形調和仮説の要点をまとめると、絶対参照枠において、Levinson のように、西洋語の東西南北に観察される極めて抽象的な絶対参照枠を基準とした記述をするのではなく、上のマナム語の例に観察されるように、言語が使用される環境 (ランドマーク) に反応する中でどのように方位関係を形成するのか、つまり、この場合、絶対参照枠が2者ではなく、ランドマークも含めた3者間の関係を前提に形成されているのものであると考えた方が、通言語的な絶対参照枠の特徴を適切に記述できるのではないかという提案である。(この問題に関しては改めて3節後半で議論を行う。)

3. 中央アラスカユピック語 (CAY) における指示詞語源の特徴

では、この環境への反応が方位関係の形成に含まれるという地形調和仮説の観点から、CAY の指示詞の使用を考察していくことにしよう。1節、図1と図2で概観したような指示詞の方向制約はどのような地形的特性に動機づけられていると考えることができるだろうか。Fortescue (2011:54) に従えば、エスキモー (ユピック-イヌイト) 諸語は村が主に川沿いに存在し、「川」の生活に依拠するタイプの言語 (主に CAY) と村が海岸沿いに存在し、「海岸」の生活に依拠するタイプの言語に大別できる (主にイヌイト語 (西から順にイヌピアク方言、イヌクティウト方言、西グリーンランド方言など)。3.1 節では、まず、CAY の指示詞が川沿いの典型的な村に観察される地形の特徴とどのように相関関係を示すのかを概観する (宮岡1978:13-24; 宮岡1987:136-148; Jacobson 1984; Jacobson 1995: Ch.6及び、筆者の言語コンサルタントである John Toopetlook 氏の観察・確認に基づいている)。その考察に基づいて、3.2節において、地形を前提として形成された指示詞が建物内でどのように動機づけられたかたちで転用されるのかを考察する。この記述に続いて、最後に、3.3節で、指示詞の絶対方位への拡張とその動機づけに関する示唆を行う。

3.1. 村の地形と指示詞の方向制限

1節で述べたように、CAYには英語のthatに対応する指示詞が27あり、thisに対応するものも含めると、通常、下の表1のような形でまとめられる³。

表1. CAYの指示詞 (Jacobson 1995: 76を基に作成している。宮岡 1987: 141も参照されたい。)

			accessibility	restricted	extended	obscured
(1)	A	Close to Speaker (Close to Listener)	more accessible	una	man'a	imna
	B		less accessible	tauna	tamana	
(2)	C	Away from Speaker on level	more accessible	ingna	augna	amna
	D		less accessible	ikna	agna	akemna
(3)	E	Up from Speaker	more accessible	pingna	paugna	pamna
	F		less accessible	pikna	pagna	pakemna
(4)	G	Down from Speaker	more accessible	kan'a	un'a	camna
	H		less accessible	ugna	uegna	cakemna
(5)	I	Inside/outside from Speaker	more accessible	kiunga	qaugna	qamna
	J		less accessible	kegna	qagna	qakemna

まず、直接、方向・方向に関係しない部分の説明から始めると、CAYでは、指示対象物を指示するのと合わせて、その指示対象物の知覚的な状態を同時に表す必要がある。その区別が、縦列に示された restricted、extended、obscured の3つの区別である。例えば、横列1段目 A に示した、una、man'a、imna は英語の this (話者の近くにある) に相当する意味を表すが、一瞥で全体を捉えられる、静止した、サイズの小さいものは una (restricted)、一瞥で捉えられない、長いものや大きなもの、あるいは、動いている指示対象物は man'a (extended)、そして、話者の近くだが、視覚に入っていないもの、照応的なものには imna (obscured) がそれぞれ用いられる (cf. Jacobson 1984: 654、および、宮岡 1987: 140-143を参照されたい)。縦列2段目 B はこれに、接頭辞 ta- がついたもので聞き手の近くにあるもの、聞き手にとって、横列1段目 A の意味関係を表すものに用いられる。以下では、表1において、黒枠で囲った restricted (小さくて動いていないもの) に挙げられた指示詞を例に説明を進めていく。ただし、上で述べた条件が整えば、その例は extended としても obscured としても用いられることをあわせて理解されたい。

下の図5を考察することから始めよう。図5に示されているように CAY 話者は、自分にとって指示対象物が上、水平、あるいは下にあるかに応じて、それぞれ異なる指示詞を用いる。例えば、木の上に鳥が止まっているのを下から指し示す場合は、pikna yaqulek 'that bird' (表1の(3F))、外で座っていて目の前のテーブルに鳥が止まっているような場合は、ingna yaqulek 'that bird' (表1の(2C))、そして、足元に鳥がいる場合、kan'a yaqulek 'that bird' (表1の(4G))となる (垂直関係においても、CAYの指示詞は角度の指定 (angular specification) を示すことも確認されたい)。

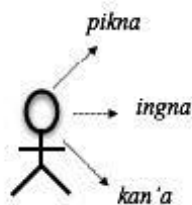


図 5

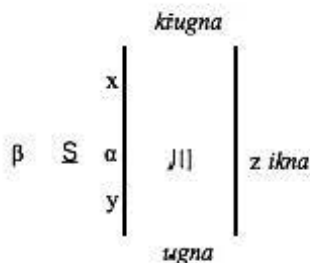


図 1'

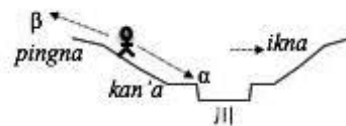


図 6

³ 表1では、指示詞語根の単数・絶対格の代名詞形が使われている。以後 CAY に関しては、分かりやすさのためにこの代名詞形式で表記する。もちろん、名詞として絶対格以外の格表示も可能であり、また副詞化、方向句化も可能である。本稿では指示詞語根の表す方向性に焦点を当てたため、最もシンプルな単数・絶対格形式を用いて説明していく。

このことを前提に、その横の図1'をみてみよう（だいたい川幅が30メートルくらいの大きさという縮尺感覚で図1'を見ていただきたい）。興味深いことは、垂直関係において、「下」を表す図5の kan'a が、図1'においては、 α にあるものを指すことができることである（ $\alpha = \text{kan'a calissuun}$ ）。実際、kan'a は S の足元から真っ直ぐ川の中央付近にあるものまでを指すことができる。この kan'a の使用範囲が伝統的に川に生活基盤をおく、CAY 話者にとって、全く自然である理由は、隣の図6に示したように、川のある地形では川に向かってなだらかな土手、坂が形成されていることが普通であり、川の方を見ることは視線が下がることと連動するためである。

逆に、川の反対側 (pingna) を見ることは、視線が上がることを、つまり、上を見ることを意味する。表1の(3E/F)において、CAY の指示詞では、二つの「上」が指示詞としてカテゴリー化されていることを確認されたい。図5の pikna、つまり、上方にある手が届かない物も「上」であるのと同時に、川側から陸にある物を見るのも、「上」、pingna と認識される。この理由から図1'の β の位置にあるものは、地面にあっても pingna を使って指示されることになる。

もし、図6の地形を考慮に入れずに、辞書などで表1に示したような情報のみが与えられ、英語や日本語の感覚で意味を推測するとどのようになるであろうか：「kan'a (指示詞)、話者の足元にあるもの、あるいは、川の土手のような accessible な場所にあるものを指す場合に使われる」。図1'において、x、y、z、そして、 α 全てが kan'a によって指示可能と判断するのではないだろうか。同様に、CAY において、「accessible な「上」と less accessible な「上」が指示詞によって区別される」とあった場合、木の下の方の枝にあるものは、木を登ればなんとかかなりそうなので pingna (accessible)、一方、高い木の上にあるようなもの、あるいは、飛んでいる飛行機などが pikna (less accessible) と判断し（全て pikna で指示可能、後者は動いていることが意識されると extended の pagna、雲の中に入って見えない場合は、obscured の pakemna で指示される）、図1'の β の位置のように、話者との関係において、しっかりと地面に置かれているようなものに対して、pingna が使われるとは想像し難いのではないだろうか（川側から（川の中からも含めて）見て陸側にあるものに pingna が用いられる）。また、「下」を示す kan'a の指示領域が川の中央付近で終わり、対岸の z に対して、ikna と別の指示詞が用いられるのは、川の中央あたりから、対岸に向かって、下を向いていた視線が上昇に転じ、水平に近い形に戻るからであると考えられる（表1の(2CD)）。

また、ここで、次のことを考えてみよう。もし、図1'において、話者が y の位置にいて、 α の位置にある場合にはどのような指示詞が用いられるであろうか。その場合、1節で示唆したように、話者が「川上」という背景を前提に α を捉えているという解釈 (construal) がある場合は、kiugna が、単に視線が下に向き、単に地面とともに α を捉えているだけの場合は kan'a が選択されることになる。同様に、話者が x のところにおいて、 α を指示する時、「川下」という背景とともに解釈しているという感覚がある場合は、ugna、一方、単に α を地面を背景に捉えているだけの時は kan'a が使われる。興味深いことは、図1'において、話者が S の位置にいて、 α を捉える時、S と α の間に数十メートルの距離があり、自然と対岸が目に入るような状況でも、 α に対して、z と同じように ikna が用いられることはなく、その場合、上と同じように kan'a が用いられなければならないことである（以上は、特に John Toopetlook さんの考察に基づいている）。このことは「川」がランドマークとして強く働いていることを意味している。

整理すると、CAY の指示詞の使用（表1の2C から5I まで）において、解釈の背景に入らないということも含めて、指示物が川との関係でどのように位置付けられるのかという要因が最も重要なことであり、川という地形が指示詞使用のランドマークとして機能しているということである（宮岡1978: 13; 宮岡1987: 140; Jacobson 1984）。その前提とともに、まず、「川上・川下」が一つの方向軸 (kiugna/ugna) を形成し、さらに、その軸との関係で、川側・陸側（川の反対側）(kan'a/piugna) がもう一つの軸を形成していると考えられる。そして、CAY の特に興味深い特徴として、後者の軸が、川を中心を超えないという点にあるとまとめられる⁴。

3.2. 村の地形とその建物への転用

本節では、CAY 話者が前節で見た指示詞をそのまま建物の中でも用いるということを考察したい。つまり、CAY 話者は指示詞の使用に際して、川を中心とする地形を、トポロジカルな (Talmy 2000: 25) 形で転用し、実際の地形的特徴を有しない建物の中で用いるという事実を焦点をあてた記述をしていく。

まず、1節で考察した図2を振り返ることから始めよう。下の図2'をご覧ください。

⁴ この川側・陸側の軸が川を中心を超えて、対岸にまで及ばない、ということ補足する事例として次の場合を考えてみよう。話し手（と聞き手）が、池の真ん中にボートでいて、その周り、360度広大なツンドラが広がり、何も視界を妨げるものがないような場合、指示詞の使用は、視線が下がっているボート周辺360度は kan'a で指示され、それより向こう側のツンドラ地帯（陸地）は360度すべて pingna を用いて指示される。



図2'

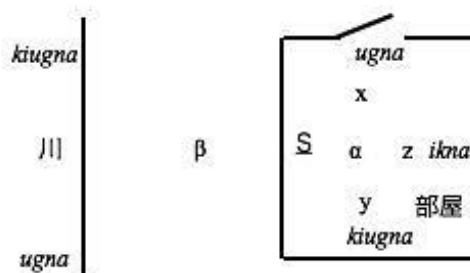


図7

図2'において、図1と同じように *kiugna*、*ugna*、*ikna* が用いられていることを確認されたい。この指示詞の使用から、ドアの部分「川下」に、その反対側を「川上」に見立てていることが類推できる（宮岡1978: 13-24; 宮岡1987: 136-148; Jacobson 1984）。まず、建物の中でも、上の図5で示したように、話者の手の届かない上のものを指示する際には、*pikna* が使われる（例えば、天井に止まっている虫や電球、シミなどを指すときにこの指示詞が使われる）。また、少し離れた α の位置にテーブルなどがあり、その上のものを指す場合は、水平の *ingna* が選択される。話者の足元にあるものは *kan'a* で示される。床に直接座っていて、 α の位置にテーブルなどが無い場合、部屋の中心あたりまで、床にあるもの（例えば α ）は、*kan'a* で指示され、中心をこえた、 z のような位置にあるものには、*ikna* が用いられるという特徴を示す。つまり、前節でみた村の地形に沿った指示詞の使用と同じ配置を示すものが部屋の中でも現れてくる。また、図1の特徴と同じように、例えば、話者が y の位置にいて、 α を指示するとき、ドアを視界に取めているような場合は、*ugna*、指示対象物を床との関係でのみ捉えている場合は、*kan'a* が用いられる。反対に、話者が x の位置にいて、奥の壁を視界にとらえながら α を指示するときは *kiugna* が用いられ、一方、床と指示対象物の関係のみが意識される場合は *kan'a* が用いられる。このことから CAY 話者は、ドアから奥の壁に見えないライン（川）を作り、それに沿う形で、指示詞の指示領域を決定していると考えることができる。この「川」の見立てに対して、John Tboetlook 氏ら母語話者が口をそろえて言うことは、人が出て行くというのが川の流れと同じで、それゆえに、ドアが川下（河口）と同じ役割になり、結果、その反対、つまり部屋の奥の壁が「川上」になるということである⁴。

この特徴から、すなわち、CAY 話者は、自分のいる空間にドア（出口）さえ見つければ、それを起点に村（戸外）にいたるときと同じ方向関係を指示詞を使って戸内で表すことができるとあわせて、次の二つのことを確認しておこう。まず、上の図7の β を指示する場合のように、客観的には二つの *kiugna/ugna* の軸が観察されるときに、どのように軸が決定されるのかということ、そして、それと関連して、下の図8にあるように、都会的な建物で一つの空間に複数のドア（出口）がある場合はどのように対応するのかということである。

図7において、 β の位置に犬がいるとしよう。この犬を指示する場合、家の中にいる話者は、通常、外を意味する（表1の(5J)）の指示詞を用いる（つまり、家の中の「川」が基準として採用される）。例えば、犬が外に繋がっていて、窓からそれが見える場合は、*kægna* (5J restricted) *qimugta* 'dog' で、壁で見えない場合は、*qakemna* (5J obscure) *qimugta* で、繋がれておらず、ウロウロしているのが窓から見える場合は、*qagna* (5J extended) *qimugta* という表現になる。一方、窓から犬が見えていて、特に、話者が外の川との関係で指示対象物を指示している場合は、図1の α と同じように *kan'a qimugta* が使われる（ウロウロしている場合は *un'a* (4G extended) *qimugta*）。特に、図7に示されたように、家の中と外で *kiugna/ugna* の方向がずれている場合、聞き手は、話者がどちらをランドマークに採用して、発語しているのかを適宜判断し対応する必要がある。ただし、この聞き手による話者の想定に関する推論は何も CAY の聞き手に特に要請されることなく、英語や日本語を含めて（おそらく全ての言語において）、指示的な表現の理解には大なり小なり関わってくることで特別なことではないと考えられる。聞き手が話者と同じ慣習化された指示詞使用におけるランドマークの使い方を習得していれば対応できる問題である。また、部屋の中のものに対して、わざわざ戸外の川をランドマークにした指示詞の使用は通常起こらない。

⁴ 筆者は母語話者に「人が出たり入ったりするのだから時と場合に応じて、*kiugna* と *ugna* は入れ替わったりしないのか」や「人が入ってくるからドアの方がむしろ *kiugna* で奥が *ugna* ではないのか」と何度も聞いたが、一律に笑われただけであった。単に人の動きを川の流れ (current) に見立てているのではなく、より広い場所に出て行くことが川の流れ (川下から河口 (そして海)) として見立てることに寄与し、その側面が母語話者間において、言語として強く慣習化されていると考えられる。

⁵ 図2'において、話者の位置からすぐ壁があるので、図1でみた、*piugna* の使用はかなり制限されるが、体育館のように *ugna/kiugna* の軸から遠く離れているものが許容されるような構造では、もちろん *kan'a* の反対方向にあるものに対して *piugna* が使われる。

次に、都会的な建物で一つの空間に複数のドア（出口）がある場合を確認しよう。図8はホテルのロビー付近を表したものである⁷。S は話者のいるところ、S から伸びる矢印は話者の視線の方向を表している。これまでの説明から推測できるように、話者がどのドアを見ているのか、どのドアを想定して発話しているのかに基づいて、指示詞が決定される。S2の話者（図の reception desk の近く）は、右側のドア（exit）を ugna とし、そこから自らに向かって、「川」のラインを引く。この場合、細い廊下であるため、piugna（陸側にあたる）は形成されない。また、S2の話者が反対を向いた場合、すなわち、S3のような視点をとった場合は、図の左側のドア（exit）を起点に指示詞の決定がなされる。

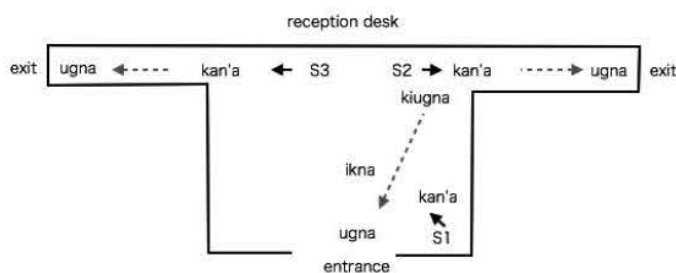


図 8

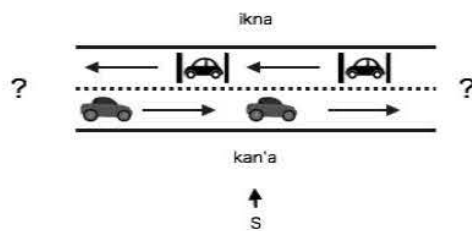


図 9

一方、空間に複数のドア（出口）がある場合の最も興味深いことは、S1 の位置に話者がいるときに明らかになる。図8の S1において、entrance がそのドアとして想定されている。話者は、そこから仮定の川のラインを引くわけであるが、ラインが entrance から reception desk にまっすぐ伸びるのではなく、斜めに引かれていることに注目されたい。この理由は、話者の空間がさらに右奥に向かって伸びている、という認識が働くためである。このことが kiugna/ugna のラインが斜めに引かれることの原因である。つまり、S1にいる話者にとって、「川上」は右奥にあるという認識が最も自然なものとなる。従って、S1の位置にいる話者にとって、reception desk にあるものは、仮想的な川の流れ（current）の向こう側に位置することになり、それらは、ikna を使って指示されることになる。川というランドマークに存在する特性が、都会的な場面でもそのまま用いられ、かつ、そのことが CAY 話者同士で共有されているため、このような方向に関する誤解はほとんど生じない。

図8の例に代表されるように、CAY 話者は、都市・街に出てきても、自らが存在する空間のドア（出口）の位置からその場で、指示詞の使用に必要な「川」のラインを形成し、村にいるのと同じように指示詞、（及び空間表現）をもちいて互いにコミュニケーションをはかる。では、CAY 話者が都市・街の生活の中で仮定の川を作るのに窮する状況、つまり、指示詞の使用を簡素化してしまう場面はどのようなところであろうか。上の図9のような状況が特にその一つに当たる。街では通常、道路は2車線で車は常に両方向に流れる。局所的にどちらが出口でどちらが入り口なのか、ドアあるいは川下の方向をその場で決定できないためである。

3.3. 絶対方位への転用

これまで、「川」というランドマークが CAY の指示詞の使用において、非常に重要な顕在化されないランドマークとして機能していることを考察してきた。CAY では指示詞語根が絶対方位表現の一部に用いられるが、その特徴をやはり、地形のランドマーク的働きという観点から考察してみる。まず、下の宮岡（1987）の指摘から考察を始めることにしよう。

(6) 「陸と海からなる拡がり分割して東西南北とする絶対方位は、エスキモーの世界ではさほど重要ではない。つねに誰もが明確に意識しているようには思えないし、日常生活で役立つことも稀である。語源においても現在の使用においても、風との結びつきが強く、したがって、地形のちがう土地では、同一の名称がまったく異なる方位をあらわすことにもなる。それだけ方位語としての純度は低い。」(p.137)

宮岡の指摘は、CAY 話者と交流すると感じられることを適切に表している。まず、(6) の最後の「純度は低い」であるが、例えば、CAY の長老に、英語で「東西南北は CAY でどう表現しますか」、と脈絡もなく、ぶしつけな質問をした場合、少し考え込んでしまったり、他の長老と確認をとったりすることに出くわす。また、狩りにしても、別の村に行く際も、前節までで述べた指示詞に基づく方向の組み合わせで全てを済ませているように思える（数十キロ、数百キロに及ぶ移動は全て川を使って行われる（夏はボート、冬は氷った川が道路になり、その上を車で移動する（もちろん、数百キロの移動には現在では小型飛行機が使われる））。例えば、支流から主流さらに支流へと方向を変えて数十キロ移動する際も、方向転換する場所の景色（の特徴）と先の kiugna/ugna という関係を局所的に用いながら移動し、実際迷うこともない。その際の景色の特

⁷ この調査は CAY の村や町ではなく、アラスカ州のフェアバンクス市で John Toopetlook 氏と行った。平均的なアメリカのビジネスホテルのフロントの構造を想定されたい。

徴に、(6)において宮岡が指摘する「風」が含まれる。つまり、一定方向に吹く風は草木を傾かせる。草木の傾きを見ることで一つの方向を確認している。

このことを前提に Fortescue (1988) によるエスキモー諸語の絶対方位表現をみてみよう。図10において、実線矢印は、方位表現に指示詞語根を用いているもの、点線矢印は「風」に由来する表現を表している。実線矢印と点線矢印の2本が用いられている方位はどちらでも表現可能ということを表している。また、CAYを除く他の3つはイヌイット語の方言である。Fortescue (1988) によれば、北極海沿岸から南西アラスカにかけては、風が北から一定に吹くのがその地理的特徴である。また、(6)の宮岡の指摘の通り、エスキモー諸語において、川や海にどのように村が面するののかによって同じ方位表現が選択されていたとしても、方位磁針上、まったく異なる方向を指している場合が多々ある(このズレと動機づけを調査しているのが Fortescue (1988, 2011) の方位語の研究である)。

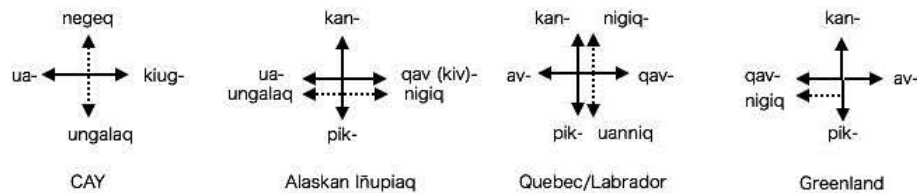


図10 Fortescue 1988:22 をまとめたもの

本稿が Fortescue の絶対方位表現の資料から着目したい点は次のことである。図10、左の CAY 方位表現において、指示詞語根同士が直交する形で用いられていないということである。ua-/kiug-は、これまで見てきた、ugna/kiugna を語根の形で表したものである。この方向と直交する方向軸には、風、つまり、風上 (negeq) と風下 (ungalaq、あるいは南風) という表現が用いられている。一方、右側3つのイヌイット語では指示詞語根を用いて4方位を表すことができる(下の表2及び表3も参考にされたい)。つまり、指示詞により形成される二つの方向軸を直交させることができている。

ここで思い出されたいのが、1節で述べたように、イヌイット語は概して、海に生活基盤をおく人たちの言語であることである。表2は Fortescue (1988: 25) による、エスキモー・アリュート語族の指示詞の語源を示したものであるが、(2C) から (5J) まで、表1と同じ区別がなされている。一方、表3は現在の北アラスカで話される イヌピアック方言 (Alaskan Iñupiaq) の指示詞表を表したものであるが、表1と表2との大きな違いとして、accessibility に関して、水平化がかなり進行していることである。つまり、3.1節で考察したように、川の地形との関係で生じている区別が、水平化されているのである(同じことがカナダで話されているイヌクティトゥート方言でも観察される (Denny 1982: 361-362); 宮岡 1987: 148 に全体的なまとめの記述がある)。西アラスカからの約2,000年にわたる、数千キロに及ぶ北極海沿岸のイヌイットの移動 (Dorais 2010: Ch.1) を非常に大雑把にまとめることになるが、北極海沿岸に移動し、「川」というランドマークの重要性が薄れることと、指示詞の使用において、表の(2CD)(3EF)(4GH)に水平化が起こること、そして、おそらくその結果として、指示語根による二つの方向軸が直交させた形で方角を示せるようになったと考えられる。

表2 Proto-Eskimo-Aleut Demonstrative System (Fortescue 1988:25 順番等入れ替えてある)

			accessibility	restricted	extended	obscured
(1)	A	Close to Speaker		ug ^w -	mað-	im-
	B			(>uð-?)		
(2)	C	Away from Speaker on level	more accessible	ing-	ag ^w -	am-
	D		less accessible	ik-	ag-	ak(əm)-
(3)	E	Up from Speaker	more accessible	ping-	pag ^w -	pam-
	F		less accessible	pik-	pag-	pak(əm)-
(4)	G	Down from Speaker	more accessible	ukn- (>kan)	un-	cam-
	H		less accessible	ug-	(unəg-?)	cak(əm)-

(5)	I	Inside/outside from Speaker	more accessible	qig- (>kig ^w -?)	qag ^w	qam-
	J		less accessible	qik- (>kæg ^w -?)	qag-	qak(əm)-

表3 Inupiaq Demonstrative System (MacLean 2014: 803 順番等入れ替えてある)

			accessibility	restricted	extended	obscured
(1)	A	Close to Speaker	more accessible	uv-	mar-	sam-
	B	the other domain	less accessible	ta-	ta-	ta-
(2)	C	Away from Speaker on level	more accessible	ik-	av-	am-
	D		less accessible		ag-	akim-
(3)	E	Up from Speaker	more accessible	pik-	pag-	pam-
	F		less accessible			pakim-
(4)	G	Down from Speaker	more accessible	kan-	un-	sam-
	H		less accessible			sakim-
(5)	I	Inside/outside from Speaker	more accessible	kiv-	qav-	qam-
	J		less accessible	kig-	qag-	Qakim

5. 結語

本稿の目的は、CAYの指示詞の使用を考察しながら、その地理的特徴が果たすランドマーク機能の重要性を考察することにあつた。まず、2節で、Palmer (2015)による、地形調和仮説のポイントを概観し、Levinson (1996, 2003)による空間指示の基本分類の問題点を確認した。その上で、3節において、言語が使われる地理的要因に反応する形で空間指示表現のカテゴリーが形成されるという地形調和仮説のテーゼに沿って、CAYの指示詞表現の特徴を地理的ランドマークとの関係に焦点を当てながら考察した。宮岡やFortescueに代表されるエスキモー諸語研究では、地理的要因が空間表現に影響を与えるということは、いわば、分析する言語の特性から当然と見なせるものである。本稿で通言語的な視点として特に示したかったことは、方向指示に関して、CAY話者が何か特別な能力を示したり、あるいは、変わったことをしているわけではないということである。話者どうしが共有するランドマーク情報が顕在化しないことは何も不思議なことではない。むしろ、1節の(2)で示したような、普遍的であると想定される空間表現の定義の方を見直す必要があるのではないかということである。

参考文献

- Denny, Peter J. 1982. Semantics of the Inuktitute (Eskimo) Spatial Deictics. *Internationaq Journal of American Linguistics* 3:359-384.
- Diessel, Holger. 2006. Demonstratives, Joint Attention and the Emergence of Grammar. *Cognitive Linguistics* 17 (4): 463-489.
- Drais, Louis-Jacques. 2010. *The Language of Inuit: Syntax, Semantics, and Society in the Arctic*. Montreal: McGill-Queen's University Press.
- Everett, Caleb. 2013. Evidence for Direct Geographic Influences on Linguistic Sounds: The Case for Ejective. *PLoS ONE* 8(6): e65275.
- Everett, Caleb, Damian E. Blasi and Sean G. Roberts. 2015. Climate, Vocal Folds, and Tonal Languages: Connecting the Physiological and Geographic Dots. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 112 (5): 1322-1327.
- Everett, Caleb, et al. 2016. Response: Climate and Language: Has the discourse shifted? *Journal of Language Evolution* 1: 83-87.
- Fortescue, Michael. 1988. *Eskimo Orientation Systems*. Copenhagen: Museum Tusulanun Press.
- Fortescue, Michael. 2011. *Orientation Systems of the North Pacific Rim*. Copenhagen: Museum Tusulanun Press.
- Jacobson, Steven A. 1984. *Yup'ik Eskimo Dictionary*. Fairbanks: Alaska Native Language Center.
- Jacobson, Steven A. 1995. *A Practical Grammar of the Central Alaskan Yup'ik Eskimo Language*. Fairbanks: Alaska Native Language Center.
- Lichtenberk, Frantisek. 1983. *A Grammar of Manam*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar* vol. 2: *Descriptive Application*, Stanford: Stanford University Press.
- MacLean, Edna Ahgeak. 2014. *Inupiatun Uqaluit Taniklutun Sivunijit: Inupiaq to English Dictionary*. Fairbanks: Alaska Native Language Center.
- Maddieson, Ian., et al. 2011. Geographical distribution of phonological complexity. *Linguistic Typology* 15: 267-279.
- 宮岡伯人. 1978. 『エスキモーの言語と文化』 東京:弘文堂.
- 宮岡伯人. 1987. 『エスキモー 極北の文化誌』 東京:岩波書店.
- Palmer, Bill. 2015. Topography in Language. In *Language Structure and Environment: Social, Cultural, and Natural Factors*, Rik De Busser and Randy J. LaPolla (eds.), 179-226. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Tamura, Yuki-Shige. 2014. Epistemicity and Deixis: Perspectives from Central Alaskan Yup'ik. *Proceedings of the 38th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*: 494-506.